

# 父の看取りと、 私への最期の宿題 「今から、ここから」

ソーシャル  
ワーカー

馬渡 徳子

父を看取ったその日から、私は、腕時計を左手から右手に変えました。父の口癖の「逆に」が、今後の私への宿題「遺言」のように思えたからです。

認知症を発症してからの四年半、父の口癖は、ずっと「逆に」でした。父の発言や行動が、きっと周囲の人々に度々否定されることが増えていたのでしょうか。葬儀の日まで、「父は、こうして自分の尊厳を、必死で保とうとしているのかな」と、私は思い込んでいました。そのため、介護に疲れて、へとへとになっている母に、「病気なんだから、もう少しこんな風に、、、」といった、娘としてではなく、専門職としての不適切な助言？を、ついうっかりと度々返していました。新幹線に乗り換える在来線の約一時間の間に、ついさっき別れた母から「ああ

あ、えらそうに。ソーシャルワーカーだか何だか知らんけど、専門家じゃなくて、近くに住む普通の娘の方が良かった。超忙しいくせに、高い交通費使って、もう、毎月帰ってこなくていいから。お姑さんにも申し訳ない。」と、くどくどと泣かれたことも。「しまった。全く母のありのままの思いに共感できていない」と、素直に自分を省みる一方で、毎月「介護の練習に行つといで」と気持ち良く見送ってくれる夫と義父母や、介護休暇をずっと継続させてくれている職場の部下たちにも申し訳なくて、情けなくて、帰りの新幹線で、涙がぼろぼろとこぼれて仕方がなかったことも、何度もありました。

いつそのこと介護に専念しようと、三年目に突入した 2014 年春に、退職願も

申し出ました。しかし、上司に「管理者たる者こそが、率先して介護休暇を最期まで取り続けるという『労働者としての権利を行使する姿』を見せて、部下を育てなさい。『ソーシャルワーカーらしく』、社会資源も沢山使って、きっと乗り切れると思うよ。綱領に、そう書いてあるでしょう。私は、そういう姿を後輩に見せていこうとするあなたを、応援したい。」と励まされ、最期まで、毎月実家に通い続け、働き続けることを貫き通すことができました。私は、このような上司と後輩、組織を、心から誇りに思っています。

葬儀の日、弔問の方々から「昔から『逆に』という言葉が口癖だった。それは、『認知を変えてみたら』という意味。それで、硬直していた課題の展開が変わった場面が沢山あった。本当に感謝しています。」との言葉を戴きました。

実家は、かつて生活困難な複数の家族に、貸間をしていました。食事時になると突然現れる新しい同居人さんたちに、「あっ、また、おかずが減る」と子どもらしくぶすっとした顔を思わずしていた自分を、今でも覚えています。その方々から、「あなた方のご両親に、幾度かの生活の危機を助けてもらいました。窮地をしのぎ、ようやく次の目途が立ち、貸間を出るときに、お餞別に添えて『大丈夫。前を見て。不幸な出来事だったけど、『逆に』過去が無駄になることは何もない。』とお声かけ戴きました。」との内容のお手紙も戴き、「えっ、『逆に』は、昔から？ ああ、そういうことだったのか」と、ようやく合点がいったのです。

この「『逆に』と認知を変えて、違う見立てに出会ってみる」という発想の転換は、ふりかえると、正に「認知症の人と家族の会」の皆さんより学んだことでもありました。どんな場面にこの発想を活かすことができたのか、心よりの御礼の気持ちを込めて、「当事者団体の持つ力」と、そして「家族システム論を学び続けてきた効果」についても、四回に分けて、ご報告申し上げたいと存じます。

2010年の秋、母から「父の変化」を伝える連絡を受けました。翌年の夏に、初孫の結婚式に参列することを、本当に楽しみにしていた父。「警察と救急車のお世話」になることが増えたというのです。同居の孫に、発達障害があり、目が離せないで、母はお先真っ暗になっていました。生涯の40年以上を、諸外国に単身赴任していた父は、ジェントルマンで、いつもニコニコと穏やかで、70台半ばで会社の役職を完全に引退してからは、地域活動やボランティア活動を精力的に行い、きっかけは障がいのある孫のためでしたが、地元でもいち早く「子ども見守り隊」を結成していました。そんな父が、段々と人が変わったように性格が鋭く、攻撃的になっていったのです。一日三回の大量の内服薬が、気にはなりましたが、父と同年ぐらいのかかりつけ医がいて、母も気兼ねなく様子の変化を詳しく伝えながら、父も機嫌よくお付き合いをしていました。

そこで、とりあえず、翌年の春まで、地域包括支援センターの保健師さんに

「父のエコマップ(人や機関との関係性の構造図)」を手渡し、ご近所さんで親切な方、派出所の警察官(親戚)、取引銀行・農協・郵便局、コンビニの店長さん、民生委員さんに、「さりげない見守りと母への変化のご報告」をお願いし、同じく県外にいる弟夫婦と、毎月一回ずつ帰省して様子を観る事にしました。帰省中には、やがてデイサービスに通う予行演習ができるように、私たちも、地域交流会(地域サロン)に参加して、改めて顔なじみの関係を作れるようにしました。弟夫婦と、今度はどんな小洒落たお土産にするかと競い合い(笑)、地域の老人会の皆さんが毎月喜んでくださり、父が誇らしげな顔をするので、これまた帰省の楽しみの一つとなりました。父は、後に、いつも自分を保護してくれる派出所とコンビニのレジ横に、「私と友人の共著本」を、せっせと飾るようになりました。どんなルートで手に取られたのでしょうか。一通だけ特別支援学校の教員さんから、「あなたは、私の親の教え子です。進行の早い難病と闘っていますが、生きていて良かったと、本当に喜んでおります。」とのお手紙を戴き、早速、帰省中に、先生の元へ、お見舞いとお礼に訪ねさせて戴きました。本当に、びっくりポンでした。

この頃より、私は当事者の一人として、また私が担当させて戴いている家族の方と共に、「認知症の人と家族の会」の例会に、時々参加していました。その時に、参加者の皆さんや事務局の方々から、「絶対に専門職からは発想できない当

事者ならではの対処法、沢山のヒント」を戴き、折に触れ、それをあれこれと一つ一つ試していくことができました。

その年は、2011年。東日本大震災の年でした。迷子になったり、コンビニの商品を拝借したり、気を失って大怪我をして倒れて搬送されたりといったエピソードが相次ぎました。洋服やら、食料品、日用品を沢山買い込んで、二階の父の二部屋は、物でいっぱいになっていきました。例会で、「母が、『警察官の親戚が多いのに、恥ずかしい』と泣くの」と愚痴をこぼすと、「あら、警察官が親戚で良かったじゃない」と、さらっと返され、「本当だ。これって、『逆に』強みじゃん。」と元気が出ました。毎月、帰省すると、必ず父の行動範囲の変化を確認するために、父と散歩をしていました。その時に、お寺の和尚さんから、「お父さんがね、私が東日本大震災の翌日に寺の黒板に『生きていてだけで、大体オッケ。BY マギー司郎』と書いたその日から、時々綺麗な花を生けて下さるようになりました。登下校の子どもたちに向けたメッセージを、意識的に書いていたのですが、残念ながら反応がなかった。けれど、花が生けられるようになってから、子どもたちも、たまに花を生けてくれるようになった。今は、『徘徊とは言わずに、自由な外廻り』って言うんですよ。いいねえ。フーテンの寅さんみたいで。幸せを運ぶんだなあ。」という話を聴かせていただきました。私は、それから自分の担当させていただく利用者さんのケアプランには、「自由な外廻り」

と表現するようにしています。

また、父がせつせと溜め込んでいた二階の「お宝」が、『逆に』地域のお役に立てる機会もありました。2014年の夏、実家も床上浸水しました。町に一軒ずつしかないコンビニとスーパーも浸かりました。父と障がいのある孫には、避難所生活は無理だろうと心配で駆けつけた時、「ああ、今こそ地域にお返しができる」と思いつき、父がせつせと二階に溜め込んだ「高カロリーの栄養補助飲料」や日用品を、ご近所さんに、父と一緒に配ることができました。父は、そ地域の役職時代を思い出したのか、とてもニコニコと嬉しそうでした。

この日、担当のケアマネジャーさんより、「父と障がいのある孫の二人を、ショートステイに」とのご提案を戴きましたが、丁重にお断り致しました。実は、毎年恒例の私の勤務先での、「認知症の人の理解と対応についての学習会」の企画に、偶然前日に、県の支部長さんをお招きしていました。そのお話の中で、「どんなに認知症状が進んでも、何もできなくなった人のように接しないで。昔培っ

た能力は、意外と発揮できるんですよ。真面目なので、二つ以上のことはできませんが、一つのことは集中力がありすぎるくらいできます。疲れに気付けないので、頃合をみて止めても欲しいのですが(笑)、どうか、生活史をしっかりと聴いて、身につけた能力を、活かせる場面を意識的に作って欲しい。」との言葉が思い浮かんだのです。「ああ、ここで活かさなきゃ」と思い、父にはコツコツと水に浸かった本などを、しっかりと紐で縛り付ける役割をお願いしました。父から、子どもの頃に、上手な荷物の縛り方を教えてもらった記憶があったのです。正解でした。一緒に駆けつけてくれた私の夫や弟夫婦が、目を見張るほどでした。早速、このいきさつを支部長さんに、ご報告申し上げます。

改めて、「支援され続ける人をつくるのが、本当の支援ではない」と、自分の実践をも、素直に振り返る機会となりました。

今回は、「素敵な先生たちとの出逢いと、新たなつながりをつくる」に、続く